

三月、小学校令改正、義務教育六ヶ年になる。

四月、札幌外十二郡内に一級町村制実施

五月、新冠郡各村戸長役場を分離し、高江村外十ヶ村戸長役場が高江に置かれた。

六月、日高種馬牧場を浦河郡西舎村に新設。

札幌農学校を東北帝国大学農科大学とした。

九月、支庁長委任の未開地処分を三万坪とした。

・明治四十一年（一九〇八）

二月、浦河大火、支庁、警察等二五五戸焼失。

四月、罹災民慰問に北条侍従を派遣、浦河支庁焼失品調弁費五、五九〇円（予算）

浦河支庁焼失品調弁費五、五九〇円（予算）

浦河支庁官舎火災復旧費七、五五六円（予算）

北海道国有未開地処分法改正し公布、未開地はこれを売払い、別に自作者に対し特定地を設けて無償貸付とした。

六月、北海道庁札幌管林区署浦河分署として創設され日高一円の国有林の管理に当る。

九月、代議士選挙（三区三名郡部三名選出）

○ 新様似水銀鉱山が発見された。鉱区七十二万九千六百四坪

この年経済界はますます不況となった。

・明治四十二年（一九〇九）

一月、北海道庁庁舎が焼失した。（八月落成移庁）

四月、札幌外五郡内に一級町村実施（江別町外八町）寿都郡十三郡内に二級町村制実施、（南尻別外十八町村）日高においては静内、門別両村に二級町村制が布かれた。

九月、西支庁長が小樽支庁長に転補となった。その功績が大きいだけに日高の民にとっては大きな打撃であった。

十月、第九代河嶋長管の提出した北海道拓殖事業十五年計画内閣において決定した。

○ この年前年に引続き不景気で事業不振移民が減少した。

・明治四十三年（一九一〇）

二月、荻伏村模範村として内務大臣より表彰された。

三月、道庁官制改正、小樽、岩内、寿都三支庁を併せて後志支庁とし俱知安村に置く。

四月、北海道十五年経営案確立して道政を行うことになり、（第一期拓殖十五ヶ年計画）さきの十年計画は九ヶ年で打切ることとした。

九月、苫小牧村に王子製紙会社分工場が設置された。

○ 依然不景況で十五年計画の財源である自然増収が少く、このことが今後数年間続くことになる。

・明治四十四年（一九一一）

四月、苫小牧輕便鉄道が佐瑠太（現在富川）へ開通した。翌四十五年四月にいたって乗客貨物の取扱いをはじめた。浦河よりは駅通によって連絡した。

八月、皇太子殿下本道行啓、新冠御料牧場に行啓。

・明治四十五年（一九一二）

五月、衆議院議員総選挙 定員六名

○ 浦河大火・支庁焼失

七月、北海道本庁舎落成

明治天皇崩御遊ばされ、国民悲歎のうちに明治の御代は去って、世は大正の御代を迎えるのである。

二、西忠義翁の治績

1 偉大なる貢献

昭和七年九月、浦河神社の境内に木の香も高い新しい宮がたてられた。これは日高開発の恩人西忠義翁をまつる西神社である。翁は日高開発に全力を傾注され、その根基をつくった人である。その業績は日高開発史上特筆大書すべきものが余りにも多い。

「心だけ誠の道にかなひなば

いのらずとも神やまもらん」

これは翁の母が、少年忠義の薫陶に當つて猪苗代湖岸の天満宮参拝の折に、諄々と説き聞かせた歌である。三つ子の魂百までも、この母の教育が、やがて成人となった翁の事に當つての誠実不拔の精神を培ったのである。

翁は明治三十四年六月、浦河支庁長として日高に赴任、四十二年小樽支庁長に転ぜられるまで在職八年三ヶ月にわたり日高開発のため全力を傾注し、日高国標を作つて前途の指針を明示したばかりでなく、日高振興の八大政策を打ちたてて道路や橋梁を改修して交通の利便を図り、或は漁港の施設等、運輸の利便に意を用い、また産業の奨励に専念し、特に産馬の改良を期して日高種馬牧場の設置を実現し、共進会を催して生産を奨めるなど、日高をして共進会を催して生産を奨めるなど、日高をして馬産地としての地位を高めた。さらに水産、産業、林業の発展はもとより教育の振興によつて日高民心の啓発につとめ、また町村の自治に、諸国、諸会の活動、町村財産の造成、精神作興、道徳の奨励、衛生思想の普及とその施設、旧弊の矯正、ことに敬神崇祖心の啓培等、終始日高の開発と住民の教化に、献身的努力奨導が続けられたのである。

日高の人達は、拓けゆく日高の姿に限りない感謝を覚えた。こうして全日高の物質的ならびに精神文化に貢献した翁の偉大なる業績に対する感激が、日高開発の神として翁を神格化したのである。特に日高支庁長退官の後、日高に対しては絶大の関心をもち、常に日高開発に努力すると共に日高人士に対する指導激励に止むことがなかった。晩年にいたり、遍く日高全土に足跡を印したる一事は今なお記憶に新たなる処であつて、日高の人達の永久に景仰措く能わざる所である。

前記の西神社の造営は、昭和七年、日高町村会ならびに日高実業協会において衆議の結果、四千元をもって建設することに決定、その後、準備が着々と進められて、同年秋九月、落成式を終えて遷宮祭が行われたのである。毎年六月二十一日、翁の「日高支庁長の日」とし俗に春祭として賑わい、日高各地の人々の参拝が多い。昭和二十八年、西神社はさらに由緒深い西舎村に遷宮され、西舎神社に合祀されるにいたつた。今浦河灯台裏の高台に、賑わえる浦河漁港を見渡す西翁の記念碑が偉大な業績を讃える象徴として、建っている。

西忠義翁の碑

西翁は浦河支庁長に赴任後管内を巡視し、日高の開発は官民の協力一致がなければ到底その目的を達しえずとなし、日高の各地域

の住民代表と親しく協議の上ここに日高実業協会を創設し、翁自らその会長となつて、日高開発に献身的努力をなされた。

以来、歴代支庁長も協会々長に就任し日高開発に貢献されたのであるが、終戦後においては日高の開発は総合的に一層推進する計画の必要性が痛感されたので、本協会は發展的に解散することになった。

この時西翁の大いなる業績を讃えて永久にこれを後世に伝えようとの意図からその記念の碑を潮見ヶ丘の台上に建設し、おごそかにその除幕式が行われた。

その碑文を左記に誌して参考に供する。

表の「西忠義翁碑」は北海道知事田中敏文の揮毫である。

碑の裏には、

「西翁は会津の人身徴職より起して精励倦まず明治三十四年浦河支庁長としてわが日高に任を負うや九ヶ年にわたりよく地方開発の師父民心徳化の慈母として治績を挙げた特に道路橋梁の改修に力を注ぎ交通運輸の面を一新して産業を振興しまた産馬事業に画期的躍進を招来して冀北の名を天下に顕揚し更にまた各種団体の設置とその活動を図り育英事業の奨励に努めて健実なる人材の養成に意を尽くす等日高今日の発展は翁の至誠と熱情によるところ大なりと謂うべきである依つて翁の創設せられた本協会の發展的解散に當り碑を建てて永くその事蹟を記念する。

昭和二十八年十一月

日高支庁長

佐々木茂一

日高実業協会会長

2 日高国の標銘標識

日高には、日高国の標銘も標識も定められたものがなかったが、明治三十四年六月二十一日浦河支庁長に補せられた西忠義氏が赴任以来、日高の開発、産業の振興、教育の普及その他万般にわたり献身的努力をなされ、明治三十五年三月五日全日高住民を糾合して、日高実業協会なるものを創設し、一は行政の補助機関とし、一は内外諸問題の諮問画策の府として挙国一致、和衷協同をもって住民共栄の基礎とし、自ら会長の重責を負うて指導に任じ、さらに国標を作り、標銘を撰び、これを前途の指針として鋭意邁進、總てその範に拠らしむるようにし、日高振興八策を協定した。

一、教育増進 二、交通開展 三、産業奨励 四、疆土拓殖 五、戸口増進 六、町村経営 七、衛生保健 八、風紀振興

日高国標銘

北海之關 日高も旧し 日高最旧 七郡一州 産資頗富 黄壤豊肥 斯適耕振 蒼海波平 每占漁收 驕嘶長風 魚躍雲賓 紅旭熙々 耀于宇宙 非有天祐 豈得如斯 古人命名 良有以思 夙夜欽仰 以標国旗 永伝不朽 隆昌奚疑

紀元二千五百六十又三年

明治三十六歲在癸卯八月念七日

日高実業協会长 西 忠義撰

日高国標の太陽は、日高に因みて、国の精氣を示し、光線七線は七郡に象る。

太陽の下は、寿の字の古篆体を略して水、土と為したり、是れ日高の天地の長久と海陸資産の豊饒とを寿きたるものなり。

標銘の撰、標識の創案共に西忠義氏による。

棹頭には最初星を用いたるも後球を用いた。

3 忠義翁の詠歌

・明治三十五年、日高の標銘を撰し標識を創案した時

日高国標 高く掲げてすすまなん

わがくにひとの心あわせて

何事が成らざらめやはひとを知り

おのれを知りて誠つくさは

いわほをもつらぬきとほす誠もて

つくさばならぬ事やなからん

・教育に意を用いて

君と師と親にむくいんひとの道

まなびの庭に立ちおくれぞ

・植樹造林を奨励されて

熊のすむ野山ひらきて植えつけよ

とみの林のはて見えぬまで

・商工の発展を期して

浦安の御代にたかへあきないの

ふねに車にいくさたてして

・静内橋の竣功渡橋式に

ゆるぎなき静内橋は今日なりぬ

幾千代かけてわたれくにひと

・国旗

おのかじし心をみがけ日の丸の

御旗にこもる御国振みて

日の丸の御旗ささけて進まん

わがくにひとの心あわせて

・日高実業協会員に示す

箭 単 而 易 折 束 則 屈 猶 難 協力同心 徳 応 知 貫 萬 般 一 督 学 生

おしえ草えらみて植えよ実をなさん

のちのはかりは今にこそあれ

・戦後経営（日露戦役後）

雨ふりて地かためるときは今

はげまさらめや朝な夕なに

種おろす時は今なりときすぎて